



水上勉集

新潮日本文学

59

© Tutomu Minakami, Printed in Japan 1972

口絵写真撮影 小口 正

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 1400 円

水上 勉集 新潮日本文学 59

昭和四十七年一月十二日 発行
昭和五十四年七月二十日 八刷

著者 水上 勉

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)二六六一五一一

編集部・東京(03)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株

式会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

霧
と
影

5

雁
の
寺

169

五番町夕霧楼

225

越前竹人形

331

解説
年譜

尾崎秀樹

432 420

水上勉集

霧と影

序章 ある投書

春めいた陽気が急に初夏の陽ざしに変わり、ずいぶん春夏の間は短いものだな、と季節の足の早さを考えさせられる頃、調子はずれな肌寒い一日があったりするものです。その日、四月二十五日も朝から街は鼠色に曇り、たいへん寒い日でした。

石田社長はいつものとおり、本郷元町の自宅から堀留の事務所まで都バスで出勤なさいますと、いつもより明るい顔つきで女事務員の末野美子に、グロンサンを買いに行かせました。末野は三分間ほどで行ける都電通りの薬局からいつもの中瓶ちゆうびんを買ってきて社長に渡しました。社長は自分で瓶のフタをあけて、

「水をくれんか」

湯沸かし場から末野が水を持参すると、

「殿山あやまさんは？」

と私のことを訊ねながら薬を服用したそうです。

「下職したしやくのほうへじかに廻まわって、十時にはこちらへ来られると電話がございました」

と末野は私の電話の伝言を申しました。社長は黙って新聞を読みはじめました。九時三十分だったそうです。

その時、末野は階下の来信函らいしんぱんを見に行きました。三通の書信がきていたので、それを社長に渡しました。ハガキが一通、封書が一通、それに週刊業界紙が一通です。ハガキはK紡績の夏物服地発表会の案内状だったそうです。封書は誰からきたものか判らなかつた、と末野は言っています。九時三十分。その頃、私は亀戸の下職の家を出て、そこで出来上っていた背広を三着だけ風呂敷に包み、亀戸駅のほうへ来る途中のお得意様「マツモト洋服店」に立ち寄っていた時、ふと時計を見て九時三十分なのに驚き、五分程で用をすませて、急いで駅に来て、折よくホームへ来たお茶の水行に乗りました。

堀留へ着いたのは十時二十分でした。エレベーターが故障しているのので、階下のビルの監理室へ行つて、いつ修繕が終るかたずねてから、せまい階段を上りました。荷物を持っているので閉口しんこうでした。このエレベーターはちよいちよい故障して、こんなことはたびたびあります。あえぎながら三階の途中まで参りますと、上から降りてくる社長を見たのです。おや、と私は思いました。社長は窓を背にし、

立ちほだかるように私を睨みすえていました。瞬間、私は何か悪いことをしたような気持になり、はて、社長にこんな顔をさせる理由は何だろう、と考えましたが、すぐそれは私の思いすぎだったことに気づきました。社長は別に怒っていませんでした。逆光線で暗い廊下に向つていたため、恰幅のいい体が仁王様みたいに大きく見えなすぎないのです。

「お出かけですか」

「女房にね、ちょっと買物をたのまれてね、すぐ帰ってくるから」

社長は腕時計を見ました。そして鼠色の合オーバーの前合せのボタンを片手でいじりながら、私と階段ですれ違つておろて行きました。エレベーターの網囲いの向うを社長は急ぎ足に廻りこみ、一階へおりの階段へ消えました。

私が見かけたこの姿が最後になつたわけです。社長はそのまま帰ってきませんでした。

階下の監理室の少年が、自転車の修繕に行つていて、小伝馬町の自転車屋からペダルを踏んで交叉点を横切つてくると、社長が停留所の安全地帯(室町、銀座方面行のりば)にいろのを見かけたそうです。少年は会釈したけれど、向うは気づかなかつたと申しております。

「すぐ帰るから」と言つた社長の帰りがおそいので、女事務員を帰したあと、私はビルの閉る時間まで社に残つてみました。十時前にベルが鳴り、夫人の孝子さんからの電話

でした。私はじかに社長が元町へお帰りになつたものと思つていたので、夫人に言われてびっくりしたわけです。

「何か買物に行くと言つて、出かけられたままですよ。奥さんから頼まれた物を……何だったのですか」

「ああ、いつでもよかつたのに、幸男のベルトだったのですよ」

「ベルト？」

私は妙なものを社長は買ひに行つたな、と瞬間思ひました。夫人の狼狽はそれから大変でございました。私は心配だったので、元町のお宅まで伺つたのです。夫人の目にもべつにその朝の社長の挙動に變つた点は見られなかつたそうです。ただ、社長が朝洋服を着替える時に、ベルトの止め金が折れたそうです。

「幸男のでも貸してくれんか。新しいのを買つてきてやるから」

そう言つて社長は、坊ちゃんのベルトを締めて出かけられたそうです。變つたことと言えはそんなありふれたことぐらいで、他に行方不明になるような原因は、孝子夫人と幸男さんの三人暮しの御家庭にあり得ようはずはございません。

また、私と末野美子の勤めております堀留の事務所は、会社が倒産以来、ようやく立ち直りかけた、私どもの希望に燃えた再建の根拠地でありました。将来に對する夢こそあれ、その事務所が因になつて社長を失踪させねばならな

いような理由は何一つ考えられませんか。末野は旧社以来の忠実な事務員ですし、私とも二十年も石田社長と苦勞を共にしてきた仲間です。失踪の原因は、私どもや御家庭からでないことは誰もが認めるところでございます。それは、社長はいつどこへ行つたのでしょうか。

あの朝、なにげない顔で出社され、九時二十分から十時二十分までの間に新聞を読んで、書信に目を通し、グロンサンを女の子に買いに行かせた、ただそれだけの社長の模様を思い出すだけでは、とても失踪するような気配は考えも及ばないことでした。人間が事故にあつたり、一大事に奇遇したりする場合、あとになつて、あああれは虫が知らせたんだな、と何かを想起したりするものでございます。また、それはそれで納得がいたりするものでございますけれど、社長の失踪の朝には、まったくそのようなけぶりも見えませんでした。

私は夫人と相談の上、故郷の十日町や、社長が奉公時代に転々とされた千葉県の野田市、群馬県の高崎市などの縫製業者をたずね歩きました。他にも、社長が縁故としていたあらゆる所をたずねました。が、そのいづれにも、社長が立ち寄つたり、音信を通じたりしている箇所はありません。思いあぐねて、二十九日に孝子夫人と相談して捜索願を所轄署に提出いたしました。

刑事さんが早速捜査を開始してくださいました。いろいろ疑惑の場所が捜索されましたが手がかりは掴めません。

最後に残つたのは、当日の朝、社長宛に参りました封書の主が問題になつたことです、それは末野美子の記憶によると白い封筒にインキ書きで、石田寅造様と社長の名が楷書で書かれてあつたそうです。社長はこの封書を読んでポケットに入れて持つて出たらしく、机の引き出しや書類函を捜しても見つかりませんでした。失踪先はこの封書と関係があるのではないかと推定から、郵便局その他あらゆる手がかりを捜査していただきましたが、結局、その封書は謎を深めただけで判明いたしませんでした。その後の捜査の行き悩み状態は、あるいは捜査課長様も御存じではないかと思ひます。考えてみますと、東京には一日に百人もの家出人の届出があるそうです。大勢の行方不明の連続で刑事さんも多忙をきわめ、私どもの社長を特別に力を入れて捜していただけということとは虫のよい望みかもしれせん。が、しかし、私が今日ここに勇氣を出して拙文をしたためましたのは、私だけが心の底で考えて参りました疑惑を参考までに聞いていただきたいと思つたからであります。

捜査課長さま

それは二月三日のことでした。その男、野見山渉がはじめて私どものカミング洋行に現われたのです。野見山渉は宇田という男の紹介状をもつておりました。宇田は二年程前、今は倒産になつて明け渡してしまいましたビルでございますが、私どもの全盛であつた頃のカミングビルの

建築の際に、とほしよくがしら高職頭として出入りしていた男で、別に深い知合いでもなかったのですが、その男が改まってわざわざ名刺に紹介文を書いてきたのですから、ちよつと気にかかるところではありましたが、とにかくどんな話かまあ会ってみようと、社長はその野見山とはじめて会つたのです。野見山は現代商事の社員で、その会社は京橋にあると申しました。現代商事は北海道の炭坑労組と電気器具などを取引きしている会社で、なんでも労組の理事をしていた者が会社の幹部にいて、そのコネを寄りがかりにして大きく商売をし、今では相当の資本をもつ商事会社になつた、と野見山は会社の内容を説明してから、もしカミング洋行に背広やオーバートのストックがあつたら売つてくれないか、と頼みにきたのでした。土木建築業の宇田が紹介してきた男にしては妙な男だとは思いました。が実はこの時、私どもは八千枚の背広とオーバートを抱えて既に倒産寸前であつたのでございます。御存じのように、この冬は、繊維業界の不況は底をついていて、とくに私ども二次製品卸業者は暖冬異変で頼みにしていた冬物がさっぱり頭打ちになり、どこかの仲間業者にも六、七千枚の背広のストックはザラにあるといつた有様。大資本ならともかく、私どもの小資本の会社で八千枚の背広をストックするなど、あきらかに危機であつたわけでございます。三月には秋物決済の手形期日も迫つていましたし、この危機を乗り切るには、銀行に泣きつくか、ストックを見切るか、いずれかの方法しかありません。

ん。そういう矢先、ひよつこり現われたのが野見山でした。この男は三十二、三歳、五尺六寸ほどもある長身で、いつもダブルの洋服を着ている、まあ青年紳士と言つたら一番似合う男でした。特徴のある甲高い声と、冷たく見える青白い細面の顔が、病的な鋭い感じをあたえる男です。が、弁舌は巧みで、まことに外交手腕というか人を説得するには独得の熱弁と魅力をもっている男でした。私と社長にはこの日の野見山が話した北海道の労組との取引が、野見山の言うように契約されるなら、思いきつて見切り売りしてもいいと思われ条件だつたのです。労組はN炭坑が五千名、S鉄鋼が六千名、家族も含めると相当の組合員になります。またこの労組には購買部があつて、従業員には月賦で給料天引きで売るけれど、仕入れは組合貯金の中から一括支払いしてくれるということでした。しかも、労組は手数料として三分しか取りたてません。これは例え「三十日手形」にしても一着六千円見当に売れるものなら、もつめの商売と言わねばなりません。有名労組の手形なら労働金庫でも換金してくれることも考えられましたから安心でもございます。だが、私と社長は即答は控えました。初対面の野見山を警戒したのです。すると野見山は、「もしよろしかつたら近日中に北海道から購買課長が見えるから、その時立ち会つていただいで納得いく交渉をしてほしい」と申します。これは順序立つた言葉と思ひましたので、社長はこの時、その課長が上京されたら一度夕食でも御一緒

にしようかと、野見山に約束したのでございます。それから三日ほどして野見山は津野鳥枝という二十六、七歳と見うけられる女をつれて参りました。「会計係です」と言つてその女を紹介しました。均整のとれた長身の美しい女で、ブルーのニットイング・スーツがよく似合い、落ちついた物腰と柔らかい言葉づかいは本当に珍しいほど上品な感じで、目鼻だちのすつきりしたモデルのような美貌の主でした。野見山は女の紹介を終ると、「実は北海道から購買課長が明後日上野へお着きになる。こちらの都合はどうか……」と、きくのです。社長は日にちと時間を約束しました。とにかく会つてみるだけでも、と考えたのです。会場は現代商事のほうで準備をするというので、その連絡を待っていますと、すぐその日のうちに電話で、会合の場所はこの機会にぜひ現代商事という会社を見てもらつておく必要もあるから会社の応接室にしてくれということなのです。これはもつともなことだと私どもも信用しました。当日午後六時頃でした。現代商事から電話がかかり、社長は出かけました。その時、社長は私にも行かぬかと誘いましたが、私は仕事があつたのと、それに、この場合の交渉は社長一人のほうがいいと思つたのです。私はどちらかというと細心すぎて気の弱いところがあります。反対に、社長はいくらか粗略だけれど押し強い大胆なところがあります。こういう商売の場合は社長のほうが適していると思つたのです。話次第では八千枚のストックが売れるのですから、重大な

任務と言えたかもしれません。そうです、この日の交渉はまったく社運がかけられていたのでございました。北海道の課長は二階堂洋造という四十歳前後の男で、恰幅のいい、見るからに炭坑人らしい繕ら顔の男だつたということです。窓から川の見える応接室で社長はこの男と会い、野見山と三人で協議を重ねました。この時、野見山の出した条件は、八千枚の背広とオーバーを六千万円でコミにして売らぬか、そうすれば一括して二通の手形を切る。つまり一通は五百万円（三十日払）、一通は五千五百万円（四十日払）とするが、これは現代商事の振出しではあるけれど、N炭坑の保証手形とすること、製品は手形と引き換えに受渡しする、とまあこういうことです。振出しが現代商事であつても、炭坑の保証があればいいわけで、社長は腹の中で、うまくいったなと思つたそうです。一枚六千円以上で売れるのだから、市場の投げ売りに比べれば、いいと言わねばなりません。社長は即座に承諾しました。もつとも、この時社長は、二階堂という課長が非常に熱心で細心な男で、その契約のしかたに律義な一面を見せたのが気に入つたからだ、と申しました。その翌日、私は社で社長の自宅からの電話をうけ、この夜の結果を聞きました。夕刻五時頃でした。津野鳥枝が一人で私に面会を申し込み、お約束の手形を持ってきたと言いました。私は二階へ通し、手形を改めてから金庫に入れ、「荷物はいつ取りに見えますか」とたずねますと津野鳥枝は、「販売部の車があき次第に参ると思ひ

ます」と言つて、すぐに歸つて行きました。二十分程してトラックが二台やってきました。やがて私どもの番頭と一緒に、トラックに乗つてきた上乗りが二名ずつに分れて、八千枚の背広を積みこんだのです。終つたのは六時過ぎでした。番頭が「どこへ運ばれますか」とたずねますと、運転手が「箱崎町です」と答えたそうです。間もなくトラックは岩本町を左に曲り、夕暮れの街に消えてしまいました。二月三日から十日までに、このような私どもの運命を左右する出来事があつたわけです。私と社長が詐欺にかつたと知つたのは、それから二十日ほど後のことでした。

それは、現代商事をたずねてはじめてわかつたのです。それまでに社長は現代商事をたずねております。社長は現代商事の二階の応接間で野見山と二階堂とに会見したのです。にもかかわらず、私と社長の二人がその京橋ビルの三階にある現代商事をたずねました時は、野見山は不在でした。不在のはずです。野見山はもろん、津野鳥枝も、その現代商事と何の関係もなかつたのです。現代商事は、北海道にも電気器具にも関係のない用紙販売業者だったのでございます。まるで白日夢のようなことなので、よく聞いてみますと、この紙屋さんは野見山という男の顔など知らないばかりか、次のような野見山のトリックにひつかつたことがわかりました。野見山は三階にある現代商事の看板がビルの外側から見えるのを利用して、まずビル内に社長を入れ、二階にあつたビルの空室を利用して、これを現代

商事の臨時応接室に仕立てたのでした。この空室はビルでは借り手がくるまで、隣室にある甲陽産業という罐詰会社が椅子とテーブルを置かせてもらつていたものだったそうです。その椅子セットをうまく利用した野見山は、この空室があることを、どこでキャッチしたものが判明しません。野見山が二階堂と石田社長を招じ入れて会談したのは三十分ほどでしたが、この時間には廊下を隣室の甲陽産業の者が通つて知つていたそうです。しかしドアが閉つていましたから、その人は、新しい借り手が来て監理人が相談でもしているのかと思つて気にとめなかつたと申します。まったく、野見山の仕組んだこの芝居については、あとで捜査に当られた刑事さんも舌を巻かれ、こんな巧妙な計画詐欺は珍しいケースだと感心されたほどでございました。ところで、詐欺にかつたとわかつた時の社長と私の狼狽はどのようでございましたでしょう。とにかく捜査二課の岩田警部さまをはじめとして、刈崎刑事さま、曾田刑事さま、鎌井刑事さま、十数人にわたる皆さまの真剣な捜査の甲斐もなく、この京橋ビルからは何の手がかりも掴めなかつたのでございます。八千枚の背広の行方、野見山を紹介した薦職の宇田、野見山の乗つていた高級車、北海道から来たという二階堂洋造、津野鳥枝、使用された名刺、指紋、偽造手形の印判製造業者、等々、あらゆる手がかりをたよりに風つぶしの捜査が開始されましたが、北海道には二階堂という人物はいましたけれども人違いだったり、津野に似た

女もいたけれどやはり人違いだったり、まったく事件は迷宮に入ってしまった。これは、私どもの届出が遅かったため、一味の逃亡と証拠湮滅が完璧になされたあとであつたためでした。

私どもは仲間業者から笑われました。問屋の掟として、直接消費者に売るとは禁じられていたのです。それをあえて犯したのですから、仲間には笑われ、銀行からも信用をなくし、まったく融資を絶たれて、悲憤のうちに三月二十二日、倒産いたしました。苦勞して建てたビルは明け渡し、六十人の社員は解散しました。石田社長の憤激は見るに耐えられませんでした。高等小学校を出て奉公をし、四十五歳の今日までタバコも吸わないで礎きあげた身代を水泡にしたのでございます。

私と石田社長は、また、元の木阿弥に戻りました。現在、堀留にありますのは石田社長と私が再起を願った新しい事務所です、まだいくら残っている清算事務連絡もここで致しております。

私は社長のもつて、ふたたび、背広を風呂敷に包んで行商して歩く身になりました、けれども、考えようによっては、社長は四十五歳、私は五十歳です……まだ一旗あげることもできると思います。大世帯を張っていた岩本町時代の気苦勞の多い経営に比べれば、かえって小ぢんまりして気楽だとも言えたのです。そう思うことで、社長も私も、あの詐欺師野見山から受けた屈辱を忘れ去ろうとしました。

こつこつと再起の地固めに私も社長も頑張つて参つたのでございます。

ところが二カ月たつてから、ふたたび私の前に不吉な影が浮ぶに至つたのです。突然の社長の失踪です。

社長はいつたどこへ行つたのでございましょう。

刑事さんも、社長がその日ベルトを買いに出たという事実から、小伝馬町の都電停留所から都電に乗つた社長を想定し、その足どりを風つぶしに聞き込みに廻られました。

が、どこのデパートにも、小売店にも、確実に社長だと思われる男がベルトを買いにきたのをみとめた者はありませんでした。

そうです。社長はベルトを買わなかつたのかもしれない。孝子夫人も、その朝、別にその日のうちにベルトを買つてくるようにとは頼まなかつたと言つております。とすると、社長があつた朝、私と階段で会つた時、「女房に買物を頼まれてね」と言つたのは、ベルトのことに違ひはないけれど、その場のつくろひに私に言つたと思うしか考えられないのです。社長はやはり、その朝、来信函に入つていた封書を読んで、急にどこかへ出かけねばならなくなつたのだと思われまふ。その行先は私にも言うわけにいかなくなつたのです。私はあの時階段の上に立つた社長が、何か威嚇するように私を見下ろしているのです、はつとしました。その時の私の印象は間違つていなかつたのではないでしようか。明るい窓を背にした社長の表情はシルエツトになつ

て、はつきりわかりませんでした。だが、社長には私の驚いた顔はわかたはずです。社長は私の顔を見て、急に出かけねばならなくなつた行先のことを、私が感づいたのでないか、と狼狽したのです。社長は磊落ですが、そういう気持を巧くごまかすことのできない性格でございました。それで私を威嚇するように睨みつけていたのでございました。よう……

このように考えますと、社長の行つた場所、そうしてたぶん、その行先を指示してきたはずのその朝の封書は、謎に包まれてきます。私の疑惑をかりたてて参ります。二階堂洋造か、野見山渉か、津野鳥枝か。この三人のうち誰かが陰にあって社長をおびき寄せ、誘拐したのではないか。社長が失踪して今日で十五日目でございます。社長の失踪を、世間では不況を苦しめたあまりの精神分裂症だ。突然、社長は病人になり、どこかへさ迷い出たのだ、と言っています。繊維業界の不況を物語るモデルケースとして書きたてた業界の週刊誌もございました。だが、私は断じてそのようには思いません。社長は精神病にかかるような人ではございません。

私は、ふと国鉄総裁であつた下山さんの事件を想いだし、ました。また、ある大学の講師が、ある朝、新婚の家庭から鞆をもつて出たまま行方がわからなくなり、教授の方が謎のような一文を載せられていた新聞を読んだ記憶も思い出しました。善良な市民の一人が、幸福な家庭の一瞬、突

如として姿を消すなんてことは考えられないことだと、その時は私も思ったことでした。私は今、身にふりかかったその教授と同じ「恐ろしい影」を見た思いでおびえを持つのです。石田社長は誘拐されたのではないでしょうか……迷宮入りになつた詐欺事件ではございますが、二階堂の顔を知っている者は、この世に石田社長一人しかおりません。もちろん、私もおぼろげですが野見山と津野の顔は存じております。しかし、私は二階堂は知らないのです。たった一人の目撃者である石田社長さえいなければ、あの事件は完全に迷宮に入るので。一味は、わざわざ被害者を誘拐してまで今になって足のつくようなことはいらない、と捜査課長さまは私の疑念を一笑に付されるであります。ようか……

私はこの頃、変死人や、身許不明の死体の出た新聞記事にハッとすることがございます。

捜査課長さま、一日に百人もの家出人のある大東京で、私どもの社長だけを特別に捜査願えるものとは思っておりません。しかし、私は私の疑惑を勇気をだして認めずにはおられません。

課長さまの一層のお骨折りをお願い申しあげます。

カミング洋行専務 殿 山 理 助

第一章 教員の死

福井県の若狭海岸は岬や半島の多い所で、北陸本線敦賀駅から分岐して京都府東舞鶴駅に至る国鉄小浜線は若狭湾に沿うてせまい平野を走る。時々、汽車は波しぶきの見える岬の崖際を迂回したり、急勾配のトンネルを抜けたりして、鋸状に出没する岬をいくつも潜りぬけた。この若狭海岸が県境近くになる地点に、青岬山という深い山があった。地誌の上では、青岬山は死火山とだけ説明されていた。

もともとこの山は戦時中は舞鶴要塞地帯に入れられていたため、どの地図を開いても詳しい地形は示されていなかった。海拔千メートル位はあるだろう。福井県側から眺めると、山巔の形が富士に似て見えるところから若狭富士と呼ばれていた。が、この山中に入ると、山の径路や立木の状況や、山の北端にある小さな部落のことについて詳しく誌された印刷物はなかった。政府が禁じたためである。そのため、地図は空白にされていたし、山が深いうえに死火山独得の沃土に原始林が密生しているの、終戦になって禁が解かれた今日になっても、うっかり立ち入った者は徑に迷ってしまったのだ。山林の大半が国有林であるため、時々営林署の巡視員が入るか、付近の山馴れた炭焼入夫が入る山するぐらいいしかなかった。ところが、この青岬山の北辺

に、たった四戸しかない部落があった。部落の名を猿谷郷といった。

昔、平家の落武者が、この山中に逃げこんで住みついたのでと言われるこの部落は、海拔五百メートルほどの岩石の多い谷間に四戸の家をもち、陸稻と芋を作り、炭焼きを業として生計をたててきた。交通は山麓の青岬村に通じる一本道しかなかった。ここまで通うのに二時間半かかる。部落はまったく外界から杜絶され、自給自足の生活をしてきた。住民は山をおりてこない。十二人の人が住んでいるはずだったが、学校へおりてくる子供以外にはあまり顔を見ることがなかった。部落はラジオもなく電燈もなかった。背後は深い原始林と屏風のような断崖が海にきり立っていて、荒々しい波が一年じゅう岩を砕いていた。

六月七日の朝——青岬村の岬の入江近くにある三本松部落に住む沼井磯次という四十五歳の漁師が、岬の端にしかけた章魚壺をあげに舟を出していた。ちょうど猿谷郷の裏にある観音崖と言われる絶壁の下を漕いでいた。と、洞窟の近くの波の上に人間のようなものが浮いている。霧が深いので、磯次はギョッとしながら舟を寄せてみた。すると、それは男の死体であった。

死体は顔面を血だらけにし、目をひらいたまま浮遊していた。手には何も持っていないかった。紺の上着がずたずたに裂け、そこから裂傷の見える太い胴腹が出ていた。波打際の海苔の付着した岩と岩の間へ入りこんだり出たりして、

死体はぐるぐる廻っていた。

磯次は蒼白になり、章魚壺のことは放りだして浜へ引かえした。青岬駅前の三叉路にある駐在所へ駆けこんだのは八時五分頃であった。

この駐在所には高羽六左衛門という停年近い老巡査がいた。彼は磯次から死体のあらましを聞くと仰天した。その死体に思いあたるふしがあったからである。

二日前、この駐在所から三百メートル離れた山麓にある青岬小学校の教員笠井早男という者が、学校を出て山へ入ったまま消息を絶っていた。その教師の人相と符合したからである。巡査は電話で学校に急報した。静かな村が動き出したのは、その時からであった。

二日前の土曜日——五年生を担任している笠井早男は、猿谷郷から通学している宇田清という子が長期欠席しているので、家庭訪問に出かけたいと言って午後一時頃に学校を出た。笠井早男は校長の許可を得て事務室を出るとき、ビニールの書類鞆かばんに画用紙を入れ、それを片手に持って校庭を歩いて行った。長期欠席の子供に画でも描くようにすすめるつもりなのだろう。その何げないうしろ姿を同僚五人の男女の教師たちが見ていた。青岬山を迂回して部落へ登る道は、あるかなしかの細い途で峻しく、二時間半もかかった。その日は真夏のように暑かった。校長や教頭は、遠い道程のことを考え、何もこんな暑い日を選んで出かけ

なくても言ったが、笠井は、土曜日でもあるし、それに一度四戸だけしかない猿谷郷部落を見てきたいのだと言った。「清が一カ月も欠席しているのは、たぶん村の子供をお守りさせられているのだと思いますね。猿谷郷はずいぶん百姓仕事も大変です。竹の筒で灌水して稲を作っていると聞きましたが、この旱天で困っているのじゃないかと思えます。それに清の父親は例の病気ですし、見舞いも兼ねて行ってきます」

と笠井は校長に言った。その子の父親は狂人であった。狂人は土蔵に軟禁されているということだった。祖父と母とその子の三人暮しである。

笠井早男は同僚に会釈して出かけた。そのうしろ姿が、学校の窓から水田の中の白い一本道を通って山麓に消えて行く。笠井は時々後方を振りかえってビニール鞆を振ってみせたという。

それが、笠井早男を見た最後になった。青岬山の濃緑の巖いわの中へ吸われるように、消えたまま教師は帰って来なかったのだ。

笠井早男には雪子という妻があり、三歳になる女の子があった。彼は青岬村から海沿いに五百メートルほど離れた高浜町寄りの材木屋の離れに住んでいた。雪子は宿直でもない夫が帰って来ないので不安になった。彼女は学校や校長の家へ電話した。それで、関係者があわてだした。内聞